

氏 名	やま なか ふゆ ひこ 山 中 冬 彦
学位(専攻分野)	博 士 (工 学)
学 位 記 番 号	論 工 博 第 3888 号
学位授与の日付	平 成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	韓国集落の空間構造に関する建築論的研究 ―身体行為の視座から―

論文調査委員 (主 査) 教 授 宗 本 順 三 教 授 門 内 輝 行 教 授 樋 口 忠 彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、韓国集落の空間構造を人間の身体的行為に関する現象学的立場（主に M・メルロ＝ポンティに拠る）から解明したものであり、四つの章から構成されている。

序章では、韓国の集落（マウル）空間を俯瞰し、韓国集落についての既往研究から本研究の位置づけを行った後、この作業を通して集落の空間的要素の「思想的、信仰的背景」としての三契機（①風水、②儒教、③巫俗（シャーマニズム））を中心とする民間信仰を析出し、また道教（神仙思想）、仏教思想を背景とする空間的要素（亭子）について明らかにしている。さらに韓国の集落分析の基本概念としての「限定」「軸」「位階」について詳細に検討し、集落の空間構造の基本概念を、「巡廻する」「見る―見られる」「よむ（詠む・読む）」という身体行為に視座を据える現象学的立場から解明することの意義を述べている。

1章では、集落の「限定（＝境界分節）」について、洞祭（トンジェ：集落の安寧・豊穡を祈願する共同体祭）を取り上げ、神域を「巡廻する」行為において明らかにし、集落の「五方廻り（オーバントルギ）」の「巡廻する」行為に、可変的な「所作の拡がり」としての現象学的身体を見さだめ、そこに生成する領域境界を解明した。また身体的行為は、領域境界のかたちを素描し、自らの身体を刻印しつつ、境界のかたちを内面化し領有化することを明らかにした。さらに洞祭時の巡廻する民族ノリ（遊戯）行為によって拓かれるコスミックな世界を、韓国固有の言葉「パン（場）」と「ハン（大きい・一つ）」を手引きとして解明した。また「ハンパン」は、他者や物と共に（一つに）居合わす「大きくひろやかな」場所の重なりが含意されていることを明らかにした。

2章では、集落の「五方位」構造を、堂山群の配置（五方堂山）と堂山の祭神名（五方神）と儀礼行為（五方廻り）から浮かび上がらせ解明している。韓国集落の空間分析に頻見される「軸」構造は、風水思想、儒教、巫俗を中心とした民間信仰などを背景とした空間構成要素（宗家・祠堂・穴・明堂・案山・主山・堂山など）と結びついているが、「五方位」構造の限定に内包された一つであることを指摘した。また身体の「見る―見られる」という異方的な分節性および再帰性を手がかりに、「五方位」構造の方位の生成を明らかにし、神域と身体との融合的、共存的な場所の拡がり神域の空間経験の基底を支えていることを解明した。

3章では、集落の「亭」から「景」を「よむ（詠む・読む）」ことによる眺望領域を取り上げ、亭子の八景が拓く眺望領域の重層性を指摘し、その眺望領域が拓く日常的かつ恒常的な位階性が動態論的に現れることを明らかにした。すなわち、景の拓く集落景観において、日常的な儒教的、巫俗的、風水的な位階性が相対化され、時として道教（神仙）的なコスモスの性格をおびた拡がり生成することを解明した。また亭でよまれる「景」の構造分析によって、同質的連続性と陰陽的対立性の二契機を明らかにし、前者が韓国の伝統的な自然観、国土観である「山の連なり」を顕在化させることを指摘した。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、韓国集落の空間構造を人間の身体的行為に関する現象学的立場から解明したものである。得られた成果は次の

とおりである。

1. 空間を生成論的視点から捉え直す立場，すなわち「巡廻する」「見る―見られる」「よむ（詠む・読む）」という身体行為に視座を据える方法論が韓国集落の空間構造を解明するために有効であることを指摘した。
2. 集落の「限定（＝境界分節）」を，「巡廻する」行為をとおして分析し，集落の「五方廻り（オーバントルギ）」における「巡廻する」行為に，生成論的な領域境界を明らかにした。上記の行為における民俗ノリ性（遊戯性）において拓かれるコスミックな世界を，韓国固有の言葉「パン」と「ハン」を手引きとして解明した。
3. 「軸」以外の「五方位」構造を主題化し，「軸」構造が「五方位」構造の限定に内包された一つであることを示し，身体の分節性および再帰性から「五方位」構造の方位における生成論的意味を解明した。加えて，神域と身体との間に生成する融合的，共存的な場所の拡がり，神域の空間経験の基層をなすことを明らかにした。
4. 「亭」における「景」の眺望領域を取り上げ，集落領域における「位階性」を，動態論的に解明し，「よむ」という行為において集落景観が分節されるという動態論的途上性を明らかにした。さらに韓国の伝統的な自然観，国土観を顕在化させるために，「景」の解明が有効であることを指摘した。

以上のように，本研究は韓国集落の空間構造を，身体行為に基づく生成論的立場から解明したものとして，学術上，実際上寄与するところが少なくない。よって，本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成18年1月25日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。